HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	テレングト・アイトル『詩的狂気の想像力と海の系譜：西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』
著者	柴田，崇；SHIBATA，Takashi
引用	年報新人文学(13)：62-67
発行日	2016-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

テレングト・アイトル『詩的狂気の想像力と海の系譜――西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』

（現代図書、二〇一六年）

柴田　崇

表紙には、本書の内容を予告するようにレンブラント・ファン・レインの『ホメロスの胸像を見つめるアリストテレス』が飾られている。ホメロスが命のない造形物なのは、二人の生きた時代に隔たりがあるからばかりではない。左手を腰に取って悠然と構え、冷ややかな眼差でホメロスを見下ろしつつその頭にそっと手を置くアリストテレスの姿からは、古代の詩人を石化させた理性の驕りが感得できる。著者は、まず、詩的創作における伝統的な様式、あるいは能力が二つあると指摘する。ホメロスとアリストテレスは、それぞれ「詩的狂気」に拠る思考様式と、「ミメーシス」に拠る思考様式を象徴する。表紙の絵は、ミューズに憑依され、狂気のうちに言あげされることばと、理性の力で意識的かつ論理的に語られることばの対照を前提に、後者が前者を凌駕する時代を描き出しているのである。次に、二つの様式が西洋世界から東洋世界に伝播し、各地域、各時代に様々に受容され、変容を遂げてきた点が、古今東西のテクストの渉漁を通じて論証される。著者による縦横無尽な読解こそ本書の醍醐味だが、その吟味は読者のために残し、本稿では、理論的な枠組みと、今日的意義から本書の特長を解説したい。

「ミメーシス」が「詩的狂気」を凌駕した結果、創作活動の過程を「模倣」によって説明し、また「模倣」を旨に創作する時代が始まった。ここで著者は、古代ギリシャ語の「想像力 phantasia」の両義性に注目する。アリストテレスからホメロスに繋がる導線を遡ることにより、両者の間に位置するプラトンの思想において「詩的狂気」と「ミメーシス」が「想像力」の元で共存していたことを指摘するのである。

実際、プラトンの思想にはいくつもの両義性が確認できる。『パイドロス』では文字の効果に対して肯定論と否定論

が併記されているし、『国家』で理想の国家からの詩人の追放を主張する一方、『イオン』では詩人への称賛を惜しまず、また、『国家』で文字に基づく教育の導入を推奨しつつ、『第七書簡』では文字への不信が吐露されている。「この相反する矛盾の態度について、専門の研究者の間では、それは『懸案のパラドックス』だと考える者もいれば、『アンビバランス』だと考える者もいる（五一頁）」。著者が想定する「専門の研究者」以外にも、トロント大学コミュニケーション学派のウォールター・オングによる「オラリティーとリテラシー」、ジャック・デリダの「プラトンのパルマケイアー」など、この両義性を、口承の時代から文字の時代の境界期に生きたプラトンの葛藤として説明する説は枚挙に暇がない。それらが概ね、文化や教育制度の遷移という過去の事実の指摘に留まるのに対し、著者は、両義性に関するこれらの議論に連なりながら、プラトンの葛藤の時点から現在まで綿々と続く思考様式の二つの系譜があることを読み解き、さらに、文学の今日的意義に論を進める。すなわち、本書の特長の第一は、「ミメーシス」の席巻によってやせ細った「想像力」に、それが本来有していた「詩的狂気」の力を回復させ、文学の役割を問い直す企てにある。もちろん、ここで言う「詩的狂気」は、悪しき病的な狂気ではない。プラトンは『パイドロス』で、狂気を「予言術の狂気」「救済の狂気」「詩人の狂気」「愛の狂気」の四つに分類した上で、ソクラテスの口を借りて「詩的狂気」を次のように讃え、詩作におけるその重要さを説いている。「『さらに三番目にムッサ（ミューズ）の神々から授けられる神がかりと狂気とがある。この狂気は、柔らかく汚れなき魂をとらえては、これをよびさまし熱狂せしめ、抒情のうたをはじめ、その他の詩の中にその激情を詠ましめる。そしてそれによって、数えきれぬ古人のいさおを言葉でかざり、後の世の人々の心の糧たらしめるのである。けれども、もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ミューズの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気になせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光を失って消え去ってしまうのだ（『パイドロス』245a）』（五四頁）」。「結び」において、著者は、『時に海を見よ』（渡辺憲司）と『生き残るということ』（稲賀繁美）に文学の可能性を見出す。その理由は、それらが東日本大震災の被災者を勇気づけ、社会全体の心の傷を宥め、慰める力を持っていたからだが、その力を与えたものこそ、「詩的狂気」に他ならない。

第二の特長として、葛藤の境界を起点に、文学作品という点によって現在に至る系譜の線を描き切ったことが挙げられよう。プラトンの時代を現在とするとき、そこから過去と未来の両極に向かう道が開ける。そして、境界点で個人、および文化の中で葛藤しつつ融合していた二つの思考様式は、極点に向かうにつれて一方が強調されるのを観察することができる。ホメロスを経由して過去に遡る作業は本書の意図するところではない。著者は、アリストテレスを経由し、今日に至る道筋に文学作品を点在させ、文学史において支配的な「ミメーシス」の系譜を確認するのみならず、周辺に追い遣られ、潜在化していた「詩的狂気」の系譜の存在をも明らかにする。ルネッサンス期にマルシリオ・フィチーノが『パイドロス』から「神聖な狂気」を発掘し、それを称賛した奇跡と、紀元前一世紀頃に書かれたとされるロンギヌスの『崇高について』が一七世紀半ば以降に「発見」された僥倖により、「詩的狂気」の系譜は断絶を免れた。ロンギヌスは、イギリスにおいて「ミメーシス」陣営の経験主義の排撃を掻い潜りつつ、シャフツベリー伯によって「発見」され、シャフツベリーを経て、一八世紀のドイツ人文主義に伝播し、一九世紀のロマン主義運動で再び文学史の表舞台に立つ。そして、ドイツに留学した森鴎外を主たる経路として「詩的狂気」が日本にも伝播し、日本を起点にしたアジアへの伝播と受容の道が開かれた。ヨーロッパにおける伝播の様相を、イギリス、ドイツ、フランスの文学作品から描出し、さらに、日本、中国、モンゴルでの受容という「西学東漸」の様相までも描き出す手際は見事としか言えない。幾つもの言語を横断し、幾つもの時代を縦断するテクストの渉漁は、内モンゴル自治区で成長し、日本、およびイギリスを主戦場に文学研究に従事している著者でなければ成し得なかっただろう。門外漢の筆者に本書の文学研究におけるインパクトを正しく評価する能力はなく、本文中で紹介される先行研究との対照からそれを推測するのみだが、筆者の専門のメディア研究の観点からは、文字以前の時代に発祥した「詩的狂気」が現在まで途切れず続くことを論証した点を特筆したい。メディア研究の分野では前出のオングらの知見を拡大解釈し、共約不可能なパラダイムの転換として文字と文字以前の時代を区分する嫌いがある。継続よりも断絶を強調するパラダイム論は、ややもすると「ミメーシス」の覇権に与し、結果的に、潜在的な「詩的狂気」を発掘する作業の手枷になる危険がある。マーシャル・マクルーハンは、電気（または電子）メディアの登場を以って、文字

以前のパラダイム、すなわちオラリティーの文化への回帰を予言した。マクルーハンをアイコンとするトロント大学コミュニケーション学派では、昨今、マクルーハンの予言に基づいてオラリティーの価値を模索しているが、厳密なパラダイム論に依拠する限り、オラリティーの文化が廃れた後も綿々と続いてきた「詩的狂気」の力や、その力に心酔した先人を正当に評価することは叶わないだろう。「詩的狂気」の系譜からメディア研究の理論を再構築する作業は、異分野に対する本書のインパクトを証明する一例となるはずだ。

第三の特長は、「海」である。「詩的狂気」の系譜を辿り、「西学東漸」の様相を描き切ることができた理由の一つに、「海」への着目がある。「空」、「雲」、「山」、「森」、「大地」、「太陽」、「月」、「星」に着目すれば、「海」とは別の系統の「詩的狂気」の系譜が書けるかもしれず、創作における「詩的狂気」とは別の力の存在さえ発掘できるかもしれないが、「詩的狂気」を掻き立てる主題として「海」を取り上げたことの是非は、まさに本書が証明するところである。「結び」において「海」にまつわる文学の衰退に警鐘が鳴らされているのは、「詩的狂気」を掻き立てる存在として「海」が最も重要な主題と考えられているからに他ならない。この見立ての是非もまた、本書を読んだ者なら自ずと分かるはずである。ちなみに、表紙のレンブラントの絵は、「海」のを背景にレイアウトされている。ここには、二つの系譜が「海」を地とするときに最も鮮明に図化するとの自負が暗示されているのだろう。

まとめると、プラトンの思想に見える両義性を創作における思考様式の対立として解釈したこと、「ミメーシス」の影響下にある文学の伝統にあって「詩的狂気」の思考様式が潜在化しつつも途絶えることなく綿々と受け継がれていたのを指摘したこと、「海」への着目によってこの説に論拠を与え、二つの様式の興亡で文学史を書き直したことが本書の特長だと言えよう。以上の三点が、第一章「起源」、第二章「伝播」、第三章「受容」、第四章「変容」の順に整理されている。

「あとがき」にある通り、本書は、西洋と東洋の文学に加え、日中、日蒙の文学の比較の成果を集成した作品である一方、「はじめに」にある通り、「海」に取り憑かれた作家の代表たる三島由紀夫研究の新たな起点となるべき作品でもある。健康的な肉体を謳い上げた『潮騒』に始まり、絶対的なニヒリズムが支配する『豊穣の海』に至るまで、三島ほど「海」を主題にした作家はいない。理論は、知的

作業に従事する者たちの公共財という汎用性を持つ。その意味で、本書は、著者以外が「海」を含む森羅万象にその理論を適用する道を拓いた。そして、三島研究への適用によって得られる成果は約束されていると言っても過言ではない。今や、その果実はすべての読者の目の前で実っている。しかし、それを手にするのは著者を措いて他にいないだろう。満を持して書かれるはずの次作に期待したい。

（しばた　たかし・北海学園大学教授）